


今度こそ
幸せになります! 4

斎木リコ
Riko Saiki

RB

レジーナ文庫



登場人物
紹介

▲ マーカス ▼

初代の勇者にして、2代目の魔王。
ルイザの最初の前世である
ジュンを復活させようとしている。

▲ 女神 ▲

この世界を見守る神様。
見た目は美少女なのに
意外と適当なので、
ルイザからは「残念女神」
と呼ばれている。

▲ ゴードン

王宮の近衛騎士。
真面目で
穏やかな、
勇者一行の
まとめ役。

▲ リンジー

大祭司。ルイザから
密かに「ちびっ子」と
呼ばれるほど小さいが、
神殿組織の幹部候補。

▲ ダイアン

公爵令嬢。国一番の
魔導の使い手だが、
ルイザからは密かに
「巨乳ちゃん」と
呼ばれている。

▲ ルイザ

女神の神気しんきを操る「聖女」。
6回もの不幸な前世を持つ。
とある決意を胸に秘め、
全ての元凶である魔王に挑む。

▲ グレアム

今代の勇者。
ルイザの幼なじみで恋人。
魔王マーカスを討伐すべく、
ルイザに同行する。

目次

今度こそ幸せになります！ 4

書き下ろし番外編
痴漢が隣家に来てきた

361

7

今度こそ幸せになります！
4

一 空の城

晴れ渡った空は青く、なだらかな丘には緑が萌えています。遠くに見える山々の山頂付近は雪が残っているのか、白く霞んでいました。

何ともどかな雰囲気です。普通にお弁当持って遊びに来たのなら、これ以上はない行楽日和でしょう。

でも、違うんですよね……

「近場に魔物の気配は感じませんね」

「魔王の居城である、虚空城が近づいているせいかしら？」

「そうかもね。という事は、やっぱり虚空城は王都からこの聖地に移動してきている訳ね」
周囲の景色にそぐわない物騒な会話をしているのは、私の同行者達です。王宮の近衛騎士であるゴードンさん、公爵令嬢で国一番の魔導師でもある「巨乳ちゃん」ことダイアン嬢、神官で、神殿組織の幹部候補である「ちびっ子」ことリンジー。

三人は、私の隣を悠然と歩く勇者グレアムと共に魔王討伐の旅に出た一行です。そんな彼らと一般庶民の私はどうして一緒にいるかというところ――

「何か感じませんか？ 魔王や虚空城の気配とか」

巨乳ちゃんが神妙な顔で私に聞いてきます。その一言で、思わず深い溜息が出てしまっても仕方ないですよ。

「無茶言わないでよね。わかる訳ないでしょうが。私は一般庶民なんだから」

「いい加減に自覚しなさいな。あなたが一般庶民のはずがないでしょう？」

巨乳ちゃんの後ろでは、ちびっ子とゴードンさんが頷いています。それを知ってか知らずか、巨乳ちゃんはやたら大きな胸を張って言い切りました。

「あなたは、この世にただ一人の聖女なんですから」

……ええ、そうですね。ついこの間までは、確かに一般庶民だったはずなのに。今では世界でただ一人、女神と意思疎通ができる存在として列聖されました。

まあ、それまでも人と違ふところは少々ありましたけどね。前世の記憶を三回分持っていた事と、その三回の前世と今生とで都合四回、勇者の幼なじみ兼恋人だったという事です。

しかも前世では三回も勇者に振られたんですよ。彼らは私に待っていてくれと言いな

がら、魔王討伐から帰る事なく別の女性と一緒になつたんです。故郷に残した私には何も知らせずに。

だから今生では、グレアムが勇者に選定され旅立った後、故郷を出て遠い王都で生活を始めたんです。捨てられるくらいならこっちから捨ててやる、という訳です。

でも、グレアムは他の勇者とは違いました。なんと彼は魔王討伐を終えると、王都にいる私のもとへ来たんです。どうやって私が王都にいて知ったのかしら。

まあそれはいいんですよ。私の方も忘れようと努力しても、結局忘れられなかった相手ですから、すったもんだのあげく元サヤに戻りました。いや、別れたつもりでいたのは私だけでしたけど。

その後も色々ありました。勇者の恋人……というか婚約者？ って、実はすごく大変な立場だったんですね。

グレアムの力を利用したい貴族に軟禁されかけたり、彼を婿に迎えようとしていた王女殿下に関係がバレて責められるどころか祝福されたり、グレアムに片思いした貴族令嬢に雇われた男達に乱暴されかけたり……思い返すと、散々な目に遭ってますね、私。

そんな面倒事を乗り越えて、もう障害はなくなつたわね、とか思っていたらとんでもありませんでした。一番の難関は、私の中にこそあったのです。

事の始まりは、国王陛下から聞かされた私の洗礼名に関する話でした。陛下が、私の洗礼名は隠されていると仰つたのです。

結果的に、それは本当でした。私の洗礼名は、神殿組織の中核である聖地が秘匿していたんです。

何故聖地がそんな事をしたのか。全ては魔王を完全消滅させる為でした。他にも聖地で聞いた話は想像を絶する内容ばかりで、正直すぐには理解できなかつた程です。

魔王は勇者が倒すもの。私達はそう教えられてきましたが、それは神殿がわざと流した偽の情報でした。いえ、一部は真実だと言ひ換えた方がいかもしれません。

今の魔王マーカスは二代目で、初代魔王を倒した勇者の成れの果てだそうです。

魔王は倒されてから百年程度で復活し、その度に新たな勇者が選出されていましたが、それにはからくりがありました。魔王になったマーカスが、私の転生に同期して復活していたんです。

マーカスが復活する理由はただ一つ、私の中の「ジューン」の魂でした。彼女は私の一番最初の前世で、こことは違う世界から来た少女です。

私の転生回数は三回ではなく、六回でした。前の三回は記憶に残すのを躊躇う程悲惨な最期だったので、女神が封印したそうです。だから後の三回しか覚えていなかったん

ですね。

その封印された記憶も元に戻り、いざ魔王を消滅させようという段になって、一つだけ問題がありました。私とグレアムの事です。

彼を持つ勇者の力と私の魂は元は一つで、引き合う性質があるんですって。今までの前世で必ず勇者と恋仲になったのも、この性質のせいだったんです。

でもそれって、私がジューンの生まれ変わりではなくて、グレアムも勇者の力を持つていなかったら、私達はただの幼なじみで終わってたっていう事？

そう悩み続けましたけど、意外にも巨乳ちゃんとかびっ子子が助言をくれたおかげで、これも運命と割り切る事にしました。ですが、その決断を覆したのは、他ならぬグレアムだったのです。

彼は「運命なんて言葉は嫌いだ」と言いました。「自分の道は自分で決める」とも。

その言葉を聞いた時の私の衝撃がどれだけ大きかったか、わかってもらえるでしょうか。グレアムの言葉で、私はこの世界を離れてジューンの世界に戻る事を決めました。彼が言うように、誰かに決められたものではない自分の道を探す為に。

私達は魔王の居城である虚空城こくうじょうを目指して、早朝に聖地を発ちました。今は日が大分

高くなっています。見渡す限り牧歌的な風景が続いていますが、この空のどこかに虚空城が存在しているんですね。

魔王の狙いは私の中にあるジューンの魂ですから、私が聖地から出ればすぐに虚空城の方から姿を現すと思っていたんですけど……空には何も見当たりません。

「本当に来るのかしら」

「もうそこまで来ている」

私の何気ない呟きに応えたグレアムの一言で、その場にいた全員が身構えました。

「まだ見えないが、このまま進んでいけばいい」

そう言って、グレアムは道の向こうを指し示しました。まだ進まなくてはならないとは。聖地から離れた方が迷惑をかけずに済むのでありますが、甘かったですね。

私達は道なりに歩を進めました。聖地から伸びる道は、なだらかな丘の向こうまで続いています。丘の向こうで道がいくつかに分かれ、その先でまた分かれていくんだそうです。

道ばたには花が咲き、小鳥の声も聞こえます。これから魔王の居城へ乗り込もうという緊迫した状況に、不釣り合いな程和やかな雰囲気です。

「何だか和やかすぎて、これから魔王退治に行くようには思えませんわね」

巨乳ちゃんが、私が思ったのと同じ事を言いましたよ。きよ、巨乳ちゃんと同じ……。地味にシヨックが大きいです。

「前の魔王城への道は、もつと殺伐さつぱつとしてたからね」

「あちらに比べれば、確かに穏やかと言わざるを得ませんね」

ちびっ子とゴードンさんも同調しています。討伐の旅は、やっぱり相当大変だったんですね。

聖地からどのくらい離れたか定かではありませんが、グレアムが急に足を止めました。真後ろを歩いていた私は、その背中にぶつかってしまいましたよ。

「あたっ！ どうしたのよ、グレアム。いきなり止まったりして」

ついうっかり、いつもの調子で言ってしまった。しまった。彼とは別れ話をして以来、気まづくなっているのに……

でもグレアムはそんな事には構わず、緊迫した声で告げました。

「来る」

「え？」

彼が天空の一点を指さした途端、そこに火花が飛び散り亀裂が走ります。

ええ、空間に亀裂が入ったのです。自分の目で見ても信じられません。

その亀裂はどんどん幅を広げ、とうとう目的の城が姿を現しました。この位置からでも「城」だとわかるという事は、かなり大きいんでしょうね。

それにしても、なんだか見覚えがある城ですね。もう少し近寄れば確認できるんですが。「出ましたわね」

「ダイアン殿、術の方は頼みます」

ゴードンさんが巨乳ちゃんを振り返って言いました。空にある城へ行くには、巨乳ちゃんの魔導に頼るほか手がありませんから。

「任せなさ……あら？ 何かこちらに参りますわ」

巨乳ちゃんの言う通り、城から何かがこちらに向かってくるのが見えます。

遠目にはただの黒い点にしか見えませんが、近づいてくるにつれて、形がはっきりしてきました。

籠かご……みたいな形ですね。ただしとても大きいですが。

それはやがて私達の目の前に、静かに降りてきました。石でできた平たくて丸い台座に、何やら飾り彫りが施ほどこされています。

直径はどのくらいでしょうか。目算なので自信はありませんけど、多分大人が三人で

両手を広げてはまだ余るくらいだと思えます。

その周囲にはぐるりと手すりがついていて、こちら側と奥側の二カ所が開いていました。

「多分、これに乗れって事……よね？」

思わずみんなの顔を見回しながら確認してしまいましたよ。全員頷いています。

「迎えをよこすなんて、向こうもやる気ね」

「面倒がなくて良いですわ」

「乗るだけで運んでくれるという訳ですか。便利ですね」

え？ あつさり受け入れちゃっていいの？ いやまあ、この人達は勇者一行ですからね。さすがはこれ以上に大変な旅を終えただけの事はある、ってところでしょうか。

ゴードンさんを先頭に乗り込んでいきます。これに乗ったら、もう後戻りはできません。私より先に乗ったグレアムが、手をさしのべています。少し躊躇しましたが、段差が大きく一人で乗るのは大変そうだったので甘える事にしました。

えいや、とばかりに飛び乗ると、籠のような乗り物はふわりと浮かび上がります。振動も何もありませんね。これはいいエレベーターです。先を考えると、そう暢気に構えてはられないんですが。

エレベーターのような籠のような……もういいや、エレベーターで。ケーブルも何もなく単独で昇っていく代物ですけど。

このエレベーターは透明の膜に包まれているらしく、大分上空に來たというのに風一つ吹いてきません。寒くもありませんし。

上を見れば、虚空城はまだ遠いです。あれだけ上空にあるという事は、空気も相当薄いつて事ですよ。高山病とか大丈夫かしら。

「今からそんな弱気になつてちゃ、もたないわよ？」

私の隣でちびつ子が言いました。多分、私は相当不安そうな顔をしていたんでしょう。でもごめん。それは見当違いなんだよ、ちびつ子。これから魔王のもとへ向かうから不安なんじゃなくて、高山病が怖いんだよ。確か重症化すると死に至るはずだし。

「大丈夫ですよ！ 私達が共にいるんですもの。気を大きく持つていけばよろしくですよ」
そう言つて胸を張つた巨乳ちゃんを横目に、私は溜息をついてしまいました。

「いや、あんたが一緒でも、酸素が濃くなる訳じゃないから」

「は？ さんそ？」

あれ？ 違つたっけ？ いやいや、高山病は酸素不足で起こるんだから、やっぱり酸

素ですよ。大事大事。

この知識はジューンの記憶の一部ですね。私自身は学んだ覚えのないものですから。ただこれ、目の前で怪訝な表情をしている人達相手に、どうやって説明すればいいのやら。

「えーつと……酸素っていうのは、人間が生きていく上では欠かせないもので、目には見えないんだけど、どこにでもあるものというか……」

自分で言っていて何ですが、かなり怪しい説明です。何せ私自身の知識ではなく、ジューンの知識ですから。細かいところまではさすがにわかりませんよ。

「見えないのに、どうしてあるとわかるんですの？」

「いや、ないと死んじゃうから。で、高い場所ってのはその酸素が薄くて、そういうのに慣れていない人は病気になるのよ。ひどくなると死んじゃう事もあるの」

「何が原因で病気になるっていうんですの？」

「だから、酸素が薄いからなの！」

「どうしてそれが薄いと病気になるんですの!? さっぱりわかりませんわ！」

そろそろ白旗を揚げてもいいでしょうか。理科と呼ばれる程度の基本的な科学の知識がないと、いくら説明してもわからないですよ。

ふと気づけば、巨乳ちゃん以外の三人は無言でこちらを見えています。

「何? 何か言いたい事あるんなら言ってください」

声が少し尖^{とが}ってしまったのは、先程までの巨乳ちゃんとの不毛な会話のせいですよ、さっつと。

「それだけ元気なら心配いらないわね」

「その『さんそ』とやらは、やはり異世界の知識なのですか?」

「既に結構高い場所まで来ていると思うんだが、体調の方は大丈夫なのか? ルイザ」
さて、これから答えればいいんでしょうか。

それからしばらくは、ゴードンさんとの「異世界の知識」に関する質疑応答に終始しました。初めて知りましたが、ゴードンさんってしつこい部分があったんですね……

酸素の説明から始まって、空気の事や赤血球の事、脳の事など……。高山病の説明も一応しましたよ。傍^たで聞いていた巨乳ちゃんは理解できないらしく、しきりに首をひねっていましたけど。

ちびっ子は最初から聞く気がないようにです。科学と宗教はある意味対極ですから、興味ないんだと思います。

グレアムは特に口を挟む事もなく、私とゴードンさんの話を聞いていました。「それは異世界において、専門的な知識なのですか？」

「いえ、多分そうじゃないと思います。大半の人が知っているんじゃないかなあ」

少なくとも高山病がどんなものかは、知らない人の方が少ないでしょう。酸素や空気、赤血球とか脳の話も、大部分の人が一度は聞いた事があるはずです。あの世界は、情報が氾濫はんらんしてしまっただけから。

「そうですね……それ程進んだ世界なんですね。一度行ってみたいものです」

「はは……ははは」

一瞬、私が向こうへ戻るつもりなのがバレているのかと思いましたが。笑顔が引きつっていいないといんですけど。

「ねえ、そろそろみたいよ」

ちびっ子に言われて、改めて空を見上げてみました。エレベーターは真っ直ぐ昇のぼっている訳ではなくて、斜め上に進みながら、徐々に虚空城こくうじょうへ近寄っているみたいです。

地上からは、おぼろげに見えていただけでしたが、近づくにつれて、その細部がはっきりと見えてきました。

底部はまるで大地からこそぎ取ったような岩盤むき出し状態で、その上に建物が乗っ

ています。

「大きいですね」

ゴードンさんがぼつりと感想を述べました。そうですね。城と言うよりも、岩山と言った方が正しいように思えます。

岩盤の上にはぐるりと城壁が巡らされていて、その高い壁の向こうに、かろうじて城の屋根らしきものが見えます。

近づけば近づく程、その偉容いようが明らかになってきますが、やっぱりこの城って……
ジューンの記憶のせいかな、背筋がぞくぞくしました。

やがてエレベーターは静かに停まりました。手前はちょっとした広場になっていて、その向こうには大きな城門が見えます。

やっぱり……。見覚えがあるはずですよ。ここはジューンを異世界から召喚した王の城です。でもあの城は壊されたって大祭司長が言っていたのに。丸ごと複製でもしたんでしょうか。

不意に、ジューンの最期さいごの記憶おぼえが蘇よみがえりました。聖地で見たのと同じものです。

あの時思い出した光景が、次から次へと頭の中を流れていきます。足下が崩れそうに

なり、無意識のうちに着ている法衣の上着をぎゅっと握りしめていました。歯を食いしばっていないと、また嘔吐えづいてしまいそうです。

そうでした。記憶にある広場はまさしくここでした。もっと広いと思っていましたけれど、案外狭かったんですね。

あの時は、ここに人が大勢詰め掛けて、私は城門から放り出されて、そして——
「ルイザ？ どうした？ ……気分でも悪いのか？」

心配そうに覗き込んでくるグレアムを見て、はっと我に返りました。いけない、こんなところだ。

見れば、みんなはもうエレベーターから降りています。

「大丈夫。何でもないから」

そう言っ、私はエレベーターから降りました。グレアムがまた手を差し出してくれましたけれど、今度は無視します。

もう別れたんだから、こんなに優しくしてくれなくていいのに。気まずくて彼の表情を確かめる事もできず、先に降りていたゴードンさん達のところへ足早に向かいました。ふと気づいたんですけど、エレベーターから降りても風がまったく吹いていません。

おかしいなあ、普通ならこれだけ高い場所だと風の勢いがすごいはずなのに。

というか、この高さまで短時間で来られたという事は、結構な速度で昇のぼってきたんですね。でも頭痛なんかはありませんし、呼吸が苦しい訳でもありません。

そういうや気圧の変化も感じませんでしたよ。あの、耳がキーンってなるやつです。

術式が何かによって地上と同じ環境に保たれているんでしょうか？ そうでも考えないと、今の状況ってあり得ませんよな。

私達が広場を突っ切り城門の前に到達すると、見計らったように大きな扉がギギイ、と音を立てて開きました。ですが、どこにも人影は見当たりません。

当然ですね。ここは魔王の居城、虚空城こくうじょうです。人がいたら逆に怖いですよ。これは自動ドアだと思って気にしない事にします。

「これは…：歓迎されている、と思っ、いいんでしょうか」

「どのみち進むしかないでしょ」

ゴードンさんとちびっ子の会話を聞きながら、扉の中を覗き込んでいた私の目に、何やら奇妙なものが映りました。

何あれ？ 今、透けた人影が見えたんですが。気のせい？

周囲を見回しても誰も反応していません。もしかして、私だけが見た…：…とか？

背筋がぞくぞくしました。こ、こういうのって、口にしてしまうと余計怖くなります

よね。なので、私は黙ったままみんなの後をついていきました。

晴れ渡る空の下、風一つない城門前広場は不気味な程静まりかえっていました。

そのせいか、崩れている訳でもないのに、城が廃墟のように思えます。

それにしても魔王の居城って、もつとこう、暗雲を背景にして稲妻が走る暗黒の城という印象を持っていましたが……大分違いますね。

確かに不気味な感じはしますが、人のいなくなった廃墟に感じる不気味さだと思いません。魔王の城に感じるのとは、違うというか……。ものすごくおどろおどろしい場所だと覚悟していたんですが、肩すかしを食らった気分です。

私にとって……いえ、私の中のジューンにとって、ここは忌むべき場所です。魔王マーカスにとつても、ここには嫌な思いが残っているはずなのに、どうしてその城が魔王の居城になっているんでしょうか。

城は持ち主の権力の象徴だと聞いた事があります。王城であれば王の、地方領主の城であればその領主の。だからこそ巨大で壮麗なものになるのだそうです。

かつて人間同士で争っていた頃、敵の城を自分のものとする事には、相手を屈服させ、おとしめる意味があったんだとか。

そう考えると、マーカスはこの城を居城にする事で、あの王達の権威を失墜させた事になるのかもしれない。

厳つくて大きな門扉が開かれた先には、右奥へ向かって上り坂になっている石敷きの通路が見えます。

実は、先程見えた透けた人影は、そこを歩いていったんです。遠目だったからはつきりとはわかりませんが、確かに人の形をしていました。

あれって……幽霊？ 魔王の居城だから、そんなものがいてもおかしくはないのかもしれないませんが、極力見たくないです。覚悟して来たはずなのに、早くも心がくじけそうですよ。

「これは……かなり古い型の城ですね」

ゴードンさんがどこか感嘆したような声で言いました。みんなも周囲を見回しています。城って年代によって型とあるんですね。知りませんでした。服の流行が移り変わるのと同じでしょうか。

この城は石組みが無骨な感じを与える、広大な城です。建物そのものが大きいというよりは、敷地内にくっつかの建物が集合しているといった感じでした。

先程の人影の事は、誰も口にしません。見えてたら当然言及しますよね？ やっぱり

私だけに見えたとか？

はっ！ もしかして魔王討伐の旅では、こういった場所には幽霊がうじゃうじゃいて、みんなはとくに慣れているとか？

どうしよう。みんなに確認するべきでしょうか。

「これ、そのまま進んでいいのかしら？」

「他に道はないんですもの。この通路を行くしかないでしょう」

私の悩みを余所に、ちびっ子と巨乳ちゃんはいやに現実的な事を言っていますよ。意外と肝が据わってますね、二人とも。これも経験の差でしょうか。

通路は、奥に向かって緩やかな傾斜がついています。右手には城壁、左手には石でできた建物の外壁があり、通路の奥以外は何も見えません。

記憶通りなら、この先に落とし格子のあるやぐら門があつて、そこを抜けると既舎と兵舎が、さらに進むと工廠があるはずですよ。それらの建物の前は少し開けていて、ちよつとした広場のようになっていましたっけ。

それにしても、こんなにずんずん進んでいいんでしょうか。特に邪魔される気配もないようですけど。思わずあちこちを見回してしまいます。

どこを見ても、記憶の中にあるあの城そのままです。確か八百年以上前の建物のはずなんですけど、そんなに経っているようには見えませんよ。

石壁から雑草が生えてるなんて事もなければ、どこかが崩れているなんて事もありません。古い建物つて、それなりに劣化しますよね？ それとも石造りの城は劣化しないのかしら。よもや、魔王の力で保存されているとか？

「上ばかり見ていると転ぶぞ」

グレアムがこちらを向いて言いました。そ、そんなに上ばかり見てなんかいませんよ！でも確かに転ぶのは嫌なので、視線を下げました。

グレアムは、これまでと変わらない態度で接してきます。意識しているのは私だけなんて、なんだか悔しい気がしますよ。別れ話をした時は、態度を豹変させたくせに。

「それにしても堅牢な城ですね。攻めにくそうだ」

ゴードンさんは辺りを軽く見回して、そんな感想を述べています。見る人が違うと、感想も違うんですね。

私自身はと言えば、先程の城門広場では一瞬フラッシュバックで苦しみました、今は至ってリラックスしています。嫌な記憶があるとはいえ、見覚えのある場所だからでしょうか。それとも、この四人が一緒だからでしょうか。多分後者ですね。

「……ありがとう」

誰に言うでもなく、ぼつりと呟きました。誰にも拾ってもらえなくてもいい。自己満足でもいい。ただ言っておきたかったんです。

「何？ 急に」

聞いていたのか、ちびっ子。見れば巨乳ちゃんもゴードンさんも、グレアムまでこちらを向いています。しまった。全員に聞かれてましたよ。みんな耳いいなあ。まあいい機会だと思つて、言つてしましましょう。

「ついて来てくれてありがとう。一人で来るつもりだったけど、やっぱりみんながいてくれて心強いよ」

その分、別れが辛くなりそうだけど。でも後悔はありません。この安心感を与えてくれたみんなに、きちんとお礼を言えて良かったと思います。

四人はちよつと驚いた顔をしていましたが、すぐいつもの調子に戻りました。

「当たり前でしょう。私達は勇者一行なんですから。魔王の居城にあなた一人で行かせたとあつては示しがつきませんわ」

「何があるかわからないからね。人が多ければ、それだけ対応できる事も増えるでしょ」

「陛下に報告する必要がありますから、決着は見届けませんと」

「俺以外の男のところに、一人で行かせる気なんてない」

巨乳ちゃん、ちびっ子、ゴードンさん、グレアム。理由は四人それぞれですね。

てかグレアム。俺以外の男つてなんだ。いや、確かにそうでしょうけど、相手は魔王だつての。

それに、あなたとは結婚できないって言ったでしょ！ 本当、調子狂うなあ。

城門に続く第二の門は落とし格子のあるやぐら門で、手前と奥の両方に格子がついています。今はどちらにも上に上がつていて、開いている状態です。

通っている最中にいきなり格子が落ちてくる……なんて事もなく、無事に通り抜けました。

その先で辺りを見回しても、先程見た人影らしきものは見当たりません。怖いと思う心が見せた幻影……とか？

やがて厩舎きゆうしやと兵舎が見えて来ました。ここから進む方向が変わり、今度は左手に向かいます。その先に建っているのが工廠こうじょうです。

工廠の隣には、使用人用の宿舎と役所を詰め込んだ建物があり、他にも小さい見張り所や検問所のような建屋たてやがあります。

もう少し先にある小広場で、よく剣の稽古をさせられました。嫌だと言っても聞いてはもらえず、何度怪我をした事か。ここでの思い出は、嫌な事の方が多いかもしれません。その中でアンジェリアやソフィーの存在は、一服の清涼剤でした。彼女達がいてくれなければ、もっと早く音を上げていたでしょうね。

三人での他愛ないおしゃべりは、肉体的にも精神的にも疲労していたジューンにとつて、本当に安らぎとなっていました。

けれど、その彼女達は……

「中の建物も老朽化している様子はありませんね。魔王の城になってから、数百年は経っているというのに」

自分の考えに入り込んでいた私は、ゴードンさんの声ではっと我に返りました。いけない。今は昔の事を考えている場合ではないですよ。魔王を消滅させる、それに集中しなくちゃ。

ゴードンさんは検分するように、歩きながらあちらこちらを見回しています。建物は石造りですが、扉は木製だし金具もついています。木が傷んでいる様子はないし、金具もほとんどさびびていません。

「この城、元々は地上にあったものなのかな」

「あら、魔王が魔力で作り上げたのかもしれませんが」

ちびっ子と巨乳ちゃんが妙な事を言っています。あれ？ 二人ともこの城がかつては聖地にあった城だって、気づいていないんでしょうか。

私はつい、二人の話に口を挟んでしまいました。

「ここ、例の国の城だよ」

「例の国、とは？」

その疑問を口にしたのは、ちびっ子達ではなくゴードンさんでした。

あ、そうか。この言い方じゃ通じませんね。でもあの国の名前、知らないですよ。「魔王が襲った国です。古代王国の方じゃなくて、えーと、勇者を召喚した王が治めていた国って言えばわかりますか？」

そう言ったら、四人とも怪訝な表情をしています。あれ？ やっぱりわかりづらかつたんでしょうか。

これ以上、どうやって説明したらいいのやらと思っていたら、ゴードンさん、ちびっ子、巨乳ちゃんが、思わぬ事を言い出します。

「その城は魔王に破壊されたのでは？」

「大祭司長猊下はそう仰っていたわよね」

「それとも、魔王がその城を複製したと言うんですの？ 憎い国王の城を？」
何故私が責められてるんでしょうか。いや、三人にその意図があるとは思いませんけど、こちらの心情的にはそうですね。

「え、いや、それは私も不思議に思っただけ。ほら、あれじゃない？ 憎い王の城だからこそ、奪ってやる、みたいな」

自分で言っているけど、苦しいなあと思います。でも、この城が聖地にあった城だというのは確かなんです。

「そんな事をして何になるんですの？ その憎い王の城にずっと住み続ける事になるんですのよ？」

いや、そんな事を私に聞かれても……

「拠点が欲しいだけなら一から造ってもいいんだしね」

ちびっ子、お前もか！ いや、私だってジューンの記憶がなければ、そう思うでしょうけど。確信はあるのに、それを証明する手立てがないというのは、もどかしいものですね。

答えに窮していたら、グレラムが助け船を出してくれましたよ。

「とにかく、その王城だという証を見つければいいんじゃないか？ 柱や壁の傷とか、

床の家具の跡とか」

……あつたつけ？ そんなの。特徴というか、目印みたいなものですよ。

私が記憶している、この城があつた王城だと証明できるような何か。そんな都合のいいものなんて――

「あつた！」

「は？」

思い出した！ と思った瞬間、口に出していたようです。四人から、また怪訝な目を向けられてしまいました。

「あー、その、さっきグレラムが言った目印みたいなのが、この先にあるのよ」

そう。剣の稽古の時、つい出来心で壁の見えにくいところに、あるものを剣先で刻みつけたんですね。この世界では決してあり得ないものを。

「それがあれば、あの城そのものだって証明できるよ」

刻みつけたのは、この先の神殿前にある小広場です。この城には、王族専用の神殿がありました。城本体と一体化するように建てられていて、ちゃんと神官も常駐していたんです。

普通の兵達は兵舎の近くにある練兵場で訓練してたんですが、近衛このえとか位の高い騎士はこちらでやっています。

ここでジューンは基本的な剣の使い方なんかを、マークスから教えられたんです。ほとんど身につきませんでしたけど。人間、嫌々練習したものは習熟度も低いんですよ。そのせいでまたあの陰険国王が怒るといふ、負の連鎖になってました。今思い出しても嫌な感じですよ。

その鬱憤うっぷんを晴らす為に、稽古けいこの最中にあるものを壁の端の方に刻み込んだんです。他にも愚痴とかを刻んでる人は結構いましたね。内緒の愚痴吐き場みたいな感じでしょうか。

私達は兵舎の前を通り抜け、少し傾斜のきつくなつた道を進みました。城門から入って、建物の周りをぐるっと回るような進路になっているんです。

「敵に攻め込まれた時の事を計算して造られていますね。いい城です」

ゴードンさんは相変わらず冷静に分析しています。この人が焦つたのつて、虚空城こくうじょうが出現してあれこれあつた時くらいですよ。本当、肝が据すわつてます。

とはいえ、私はこの城が造られた時代も理由も知りません。なのでゴードンさんの分析が当たっているかどうか、実はわからないんです。

狭くて小さい門を抜けると、例の小広場に出ました。この壁の端に私が刻んだものがあれば、あの城だと証明できるんですが。

小広場を突っ切り、神殿には向かわずそのまま進みます。そして神殿の裏手にある壁の、下の方を探しました。記憶に間違いがなければ、すぐに見つかはずです。

この辺りの壁は石組みではなくて煉瓦れんがでできています。結構傷が多いですが、よく見るとわざとつけたようなものもあつたりします。見ようによっては文字にも見える、つて感じですよ。

実は、この壁には色んな噂があつて、ここに願ひ事を書き込むと叶うとか、好きな人の名前を書くとか両思いになるとか、嫌いな人の名前と罵ののしり言葉を書くとか相手が見舞われるとか言われていたんです。

おかげで、身分の上下に関係なく色々な人達がここにあれこれ書き込んでいました。時には近衛なんかも書いてたそうですよ。

その事を教えてくれたのは……マークスでした。それでジューンも刻んだんですよ。ある言葉を。

「あつた！」

ありました。確かにジューンが刻みつけたものです。というか、多分この世界の人で

は刻めないものです。

「これは……何ですか？」

「何かの模様？」

「絵ではなくて？」

そうか……これって知らない人にとっては、模様とか絵のように見えるんですね。

私はその刻みつけられたものを指先で撫でながら、答えを言いました。

「文字ですよ。ただしジューンの国の、ね」

そう。ここに刻まれているのは、この世界で使われている文字ではありません。ジューンの元いた世界——彼女が生まれ育った国の文字です。だからこの世界の誰にも、同じものは刻めない。

懐かしいなあ。これを刻んだ当時間も周囲の人達から、何て刻んだんだって散々聞かれました。絶対教えませんでしたけど。

「これで証明できましたよ？」

そう言いながら三人を見ました。グレアムは私の言った事を否定しなかったので除外します。三人とも眉根を寄せてますよ。

「じゃあ^{げい}下^かが嘘を言っていたって事？」

「とてもそうは見えませんでしたけど」

ちびつ子と巨乳ちゃんが顔を見合わせて言います。するとゴードンさんが推論を口にしました。

「というより、伝わっている情報が間違っていたのでは？ この城は周囲の地面ごと削り取ったようですから、その跡を見た人物が、城は魔王によって破壊されたと判断したのではないでしょうか」

まあ、そう考えるのが妥当ですよ。普通、城を土台から丸ごと空に持ち上げた、なんて思いませんよ。

「ちなみにこれ、何て刻まれているんですか？」

ゴードンさんの質問を受け、ぐっと詰まっしまいました。言ってもいいのかしら。これを刻んだ時、相当ストレス溜まっていたものだから、つい、ね。

別に、相手の不幸を望んだ訳ではないんですよ？ まあ、結果としては不幸になったようですけど。

言いよどむ私を見て、ゴードンさんが首を傾げています。

「何か、言いづらい事でも刻んであるんですか？」

ある意味そうですね。主に口が悪い、という意味で。あれ？ 文字だから口ではない

のかな？

「いえ、あの……『王のくそつたれ』って刻んだんです」

だって本当に嫌いだったし。これを刻んだ時は、本当に色々な意味でいっぱいいっぱいだったんですよ。

それに、あの王はいつも偉そうで、威張り散らしてばっかりいて、そのくせ怖がりとさてる。本当、ろくでもない人物でしたよ。

こちらの世界の文字で刻んだら、間違いなく大変な事になっていたでしょう。けど、誰も読めないどころか、誰も文字とは思わないものですからね。王本人に見られたところで問題はありませぬ。

でも、さすがに口が悪すぎたでしょうか。ゴードンさんの目が丸くなっています。

「ぶ」

「く……く……く……」

何か聞こえると思ったら、ゴードンさんの後ろでちびっ子と巨乳ちゃんが笑いをこらえていますよ。笑いたいなら笑えばいいじゃない。我慢せず。

「……お二人とも、ルイザさんに失礼ですよ。なるほど、そういう人物だった訳ですね。陛下から話は聞いていますから、納得できますよ。王国の為に喚び出した少女を生け贄



に差し出すがごとき行いをする人物は、尊敬には値しません」

ゴードンさんはひどくまじめな顔で、辛辣な事を言いました。そういえば彼は、国と王家に忠誠を誓っている人でしたね。そんな彼にとつて、あの王の話は聞くに堪えないものだったんでしょう。

本当にあの王は最低の人間でしたよ。思い出すだに腹が立ちます。みんなに理解してもらえて良かったのもです。

それにしても、悪戯書きもしてみるもんですね。思いがけないところで役に立ったりするんですから。刻んだ時には、夢にも思いませんでしたが。

しかしこれだけ大きな建造物に、人の気配がほとんどないっていうのは、薄ら寒いのもですね。

ただ単純に魔王の居城だから、というのとはまた違うように思えます。ジューンが生きていた頃は、いつでも人であふれかえっていたというのに……

私達は神殿の脇を通り抜けて城本体に向かいました。魔王がいるのは、やはりそちらでしょう。

神殿と城本体の間にも小広場があります。ここではよく閲兵式が行われていました。

この小広場一杯に兵士が並んでいた光景が、記憶に残っています。

城はコの字型の建物で、神殿を背にして左側に入り口があります。ここが表玄関に当たるんです。

扉は難なく開きました。まあ、鍵とかかかっているはずもないですよ。むしろ、ここも城門と同じく自動で開くかと思っただけでしたが、手動でした。

入ってすぐに、小さめのホールがあります。壁には絵画と壁掛け、端の方には小さいテーブルと陶器の花瓶が置かれています。当然、花は活けてありません。

見たところ、埃が積もっているという事もなく、手入れが行き届いています。とても何百年も経っているように見えません。つい先程、掃除したばかりだと聞いても納得できます。

ホールの右側にある扉が、今度は勝手に開きました。キィ、と軽い音を立てて開いた扉の向こうに、またあの半透明の人影が。

やっぱり何かいる!? いや、魔王の城なので何がいてもおかしくはないんですが！ わかりやすい魔物なんかより幽霊っぽい何かの方が怖い時もありますよね！ つてかあれ、本当に私にしか見えないんでしょうか？

と思っただけ隣の巨乳ちゃんの様子をちらりと窺ったら、口をあんぐり開けて扉の方を見

ています。それは扉が勝手に開いた事に対する驚きなのか、それとも例の半透明の何かを見たからなのか、どっちなの!?

聞いて確かめようとした私より先に、巨乳ちゃんが勢いよくこちらを向きました。
「い、いいいい今の見まして?」

動揺のせいも、どもっていますよ巨乳ちゃん。気持ちはわかるけど、ここはひとまず落ち着こうか。

「どっちを?」

「どっちをって……一つしかありませんでしょう!」

という事は、巨乳ちゃんの中では勝手に開く扉が半透明の人影のどちらかは、驚くに値しないんですね。

でも、私にとつてはどちらも驚くべき事なんですよ。

「うん、だからどっち?」

重ねて質問する私に、巨乳ちゃんは涙目で訴えました。

「ひ、人影が見えませんでしたの!? それも透けている!」

ああ、良かった。私だけに見えていた訳じゃなかったんですね。ちよつとほつとしました。いや、何も解決してはいないので、ほつとするのは早いんですけど。

私の反応がお気に召さないのか、巨乳ちゃんは今度はちびっ子に向かって聞きます。

「り、リンジーも見ましたわよね!」

掴みかからんばかりの巨乳ちゃんに、ちびっ子は押され気味です。

「見たけど……あれ——」

「い、言わなくて結構ですわ!!」

え? ちびっ子はあれが何なのか知ってるの? だったら正体を教えてもらった方がいいでしょうに。何かわからないからこそ怖いんですよ。正体がわかれば怖くありません。……多分。

それにしても、神官ってそういうのもわかるんですね。霊とか見えたりするのかしら。おっと、それよりも今はあれの正体を確かめなきゃですよ。

「あれ一体何? やっぱりゆ——」

「言わなくていいと申しましたでしょ!!」

私がちびっ子に確認しようとしたら、巨乳ちゃんに遮られてしまいました。怖いのはわかるけど、邪魔しないでほしいな。

「もう、うるさいなあ。ちよつと黙ってて。で? あれは何なの?」

私は巨乳ちゃんの口を両手で押さえてちびっ子に聞きました。実力行使ってやつです。

巨乳ちゃんが何だかもご言ってますけれど、無視です無視。

彼女は決定的な事を言われる方が怖い質たちのようですが、私は知らない方が怖い質なんですよ。

ちびっ子は私と巨乳ちゃんの顔を交互に見てから、軽く溜息をつけて口を開きました。

「あれ、多分残留思念ざんりゅうしねんだと思う。霊的なものは何も感じられなかったから」

「残留思念？」

あら、ゴードンさんとハモってしまいました。会話には加わっていませんでしたが、彼もちっちゃかり聞いていたんですね。

「人の思いだけがその場に留とどまったようなものよ。ここは魔王の力が満ちている場所だから、余所よそより見えやすくなっているのかも。別に悪さする訳じゃないし、気にしなくていいんじゃない？」

え……？ それ気にしなくていいの？ 本当にいいの？ 悪さしないからって放置してしまってもいいの？ 疑問だらけですよ。

でも実際何ができる訳でもないし、必要以上に怖がらなくていいって事でしょいか。

二 茶番劇

私はこの城の内部構造も少しは把握しているんですよ。ジューンだった頃、一人で出歩く事はなかったし、行動範囲も限られていましたけど。

記憶が正しければ右側の扉の向こうには廊下があり、その先に大広間があるはずです。ホールの奥の階段のぼりを上げれば居住区くじゅうくがあります。

「さて、ここから先はどう進めば——」

「向こうだ」

ゴードンさんの咳きに反応したのはグレアムです。彼が指し示したのは……右の扉でした。やっぱりそっちなんですね。

グレアムは、同じ「勇者の力」を持つマークスとは共鳴する存在です。その為、彼の居場所もわかるんでしょう。でもそれって、向こうにもこちらの位置が筒抜けって事ですよね。今更か。

ここは魔王の居城です。彼の力が満ちている場所だと、先程ちびっ子も言っていたで

はないですか。そんな場所にいるのだから、こちらの行動が向こうには手に取るようにわかっても、不思議はありません。

扉の先に進むと、隣を誰かがすつとすり抜けていきました。私の前にはゴードンさんとちびっ子と巨乳ちゃん、隣にはグレアムがいます。

じゃあ、今すり抜けて行ったのは誰？

「ひい!!」

巨乳ちゃんの悲鳴が廊下に響き渡りました。見れば、なんとちびっ子に抱きついていてます。それにつられて、私まで傍にいたグレアムに抱きついてしまいましたよ。

身長差があるものだから、ちびっ子が巨乳ちゃんに抱きつぶされそうです。顔が胸に思いつき押しつけられて、苦しそうにもがいてますよ。あの大きさと凶器にもなり得るんですね……

「い、いいい今、誰かが!!」

「わかりましたから、ダイアン殿。リンジーを放してください。苦しそうですよ」

ゴードンさんがそう言いながら、巨乳ちゃんをちびっ子から引きはがしました。ちびっ子、肩で息をしていますよ。相当苦しかったんですね。

「ぷは！ はあ、はあ、はあ……。まったく、もうちょっと考えて行動しなさいよね！

人を殺す気なの？」

「だってだって、またさっきのがー」

巨乳ちゃん、半泣きですよ。ホラー系は苦手なんですね。てか、それでよく討伐の旅に行けたなあ。あまり人の事言えませんが。

って、何やってるんですか自分！ とっさにとはいえグレアムに抱きつくなんて。しかもグレアムの方も、そんな私の肩を抱き寄せていますし。

そろーっと離れようとしたんですが、肩をがっしり掴まれていたのでできません。廊下の先を見れば、例の半透明の人影はその場で固まっています。歩いている姿勢のままなので、妙な感じですよ。映像を一時停止したみたいですよ。

その姿を見てぶるぶる震えながら縋りつく巨乳ちゃんに、ちびっ子が溜息をつきます。「大丈夫だったの。この場に染みついた記憶みたいなものだから、私達には何の影響もないのよ。ただ……」

ちびっ子が巨乳ちゃんをなだめるように言いました。ちびっ子は成長しましたね。前の彼女ならもつとバカにした言い方をしたでしょうに。お姉さんは嬉しいよ。

で？ その「ただ」って言葉の後に続くのは、どんな内容なのかな？ ほら、巨乳ちゃんも気になっているみたいですよ。

「た、ただってなんですか？ ただって！」

「あれ、ただの残留思念じゃないみたい。魔導っぽい力が働いているんだけど、それが何なのかが読み取れないのよ」

ちびっ子は眉間にしわを寄せて、動かない人影を見つめています。巨乳ちゃんも恐る恐るといった風に、半透明の人影を見ました。

じっと見ているうちに、落ち着いたようです。普段通りの様子で所見を述べました。「確かに……何がしかの魔力を感じますわね。でも普通のものではありませんわ。第一、魔導にこのような使い方はありませんもの」

そりゃあ残留思念をその場に刻みつける魔導なんて、あっても使い道ないですよ。魔導というのは生活に根ざしたものか、戦闘に特化したものどちらかですから。

「でも、どうして止まっているのかしら」

「近寄ってみれば、何かわかるかもしれないわ」

ちびっ子、度胸ありますね。

彼女は人影の方へすすたと歩いていきます。が、もう少しで手が届きそうところで、残像はまた音もなく動き出しました。近寄ると動くんでしょうか？

でも残留思念じゃないとすると、あれは何なんでしょうね。誰か……この場合はマー

カス以外にいませんが、彼が私達に見せる為に作り出した映像？ もしくは、この城にいた人物の在りし日の残像、といったところでしょうか。何となくですが、後者の方がしっくりきます。

残像はちびっ子から少し離れた場所で、また止まりました。ちびっ子が近づくと動き出します。やっぱり、私達が近寄ると、その分残像も行動するようです。これって、誘導しているって事でしょうか。

「どうやら我々を誘っているようですね。行ってみましょう。魔王が我々に何を見せたのか、この先にその答えがあるんでしょうから」

そのゴードンさんの言葉に頷いて、私達は残像の後を追いました。残像が導く先にマーカスがいるのなら、探す手間が省けますよ。

長い廊下には窓から日の光が降り注いでいて、意外と明るいです。その中を残像に導かれるまま、私達は進みました。

残像は薄ぼんやりしていて、この距離では誰だか判別できません。しかもぶれた映像のように不鮮明な為確証はありませんが、あれはマーカスだと思えます。

そしてその腕には、もう一つの人影が抱えられています。こちらは多分、ジューンの

亡骸ではないかと。巨乳ちゃんがまた怖がりそうなので言えませんが。

マーカスの腕の中にあるジューンの亡骸は、相当ひどい状態のはずです。でも同じように殺されたアンジェリア達の亡骸はきれいでした。あれは女神の力なんではないか。ジューンの亡骸の状態を想像したら、寒気がして震えてしまいました。悲惨な最期を遂げたジューンの姿を見たくはありません。

グレアムが私の肩を、より強く抱き寄せました。もう頼っちゃいけない相手なのに、その手をふりほどく事ができません。

もうじき二度と会えない場所に行くんだけど……

廊下を進み、角を曲がり、私達はやがて大広間の扉に到達しました。ここには玉座があつて、謁見はもちろん多目的に使われていました。そういえばジューンが最初に喚び出された場所も、この大広間でしたね。

残像は重そうな扉をすり抜けて行き、その後には鈍い音を立てて扉が開きました。おそらく私達を通す為に。

中を覗いた私は、一瞬息が詰まります。何？ これ。

「これは……」

「どういう事？」

「ど、どうなっていますの!?! なんでこんなに!!」

大広間の中には、多数の人影がありました。みんな半透明だという事は、彼らもまた残像なんですね。でも一つだけ先程と違うところがありました。半透明とはいえ、彼らの姿ははっきりと見えた事です。ぶれて不鮮明な事はなく、顔立ちはもちろん、服の柄まで見て取れます。

見覚えのある顔もあります。玉座にはあのクソ国王、その脇には背の低い宰相、そして魔導師長の姿もありました。玉座から離れた場所には神官長補佐もいます。ジューンの「異世界召喚」を先導した連中です。これは、一体何なの？

大広間は床が石敷きで細長い形をしています。壁も石でできていて、所々に美しい刺繍の入った壁飾りが掛けられています。

当時は贅沢な造りだったのでしようが、今はなんともみすぼらしく見えます。特にあの壮麗な王宮と比較すると、その差は歴然でした。

まだ日中だというのに大広間の中は薄暗く、なのに残像の姿ははっきり見えるという、かなり異様な光景になっています。魔王の居城ですから、異様で当たり前かもしれないけれど。

「これ、どうして止まっているのかしら」

巨乳ちゃんの言う通り、残像達は固まったままで身じろぎもしません。半透明でなかったら、蠟人形ろうにんぎょうが並んでいると言われてもおかしくない感じですね。

これ、どうやれば動き出すんでしょうか。

「わからないけど、私達が何かすれば動き出す……とか？」

「先程は近づいた途端に動き出したから、今回もそうかもしれない。魔王はこの情景を、余程我々に見せたらしいな」

ちびっ子の疑問に、ゴードンさんが答えました。なるほど。そう考えればこの状態にも納得できます。彼らを動かすスイッチは、私達がマーカスの傍まで行く事ですか。

私達は大広間をマーカスのすぐ傍まで進みました。すると、後ろで入り口の扉が大きくな音を立てて閉まります。逃がさないという事でしょうか。

大広間の中央には、赤い敷物が敷かれています。玉座から伸びるそれを中心に、両脇に貴族達の残像が並んでいる状態です。

マーカスは、その敷物のちょうど真ん中辺りにいました。

この動かない残像達の中を進むのは、正直あまりいい気分ではありません。生きた人ではないのはわかっているんですが、何だか見られているような気がしてしまっ

やがて私達は、マーカスのすぐ後ろにたどり着きました。でも、まだ彼らは動き出しません。

「ここではだめですか」

ゴードンさんが溜息まじりに呟きました。これだけ近寄っても、だめみたいですね。

「魔王が指定した位置と違うって事？」

「ではどうしろと？ まさかこれの前には回るとか言うつもりではありませんわよね？」

巨乳ちゃんが嫌そうにマーカスの残像を指さしました。怖かったのね。慣れた訳じゃ

なかったんだ……
ちびっ子は巨乳ちゃんの怖がり方を見ても、同情するつもりはないようです。軽く肩

をすくめて軽く返しました。
「さあ？ でもとにかくここでは見せる気はないって、言われているようなもんじゃな

い？」
巨乳ちゃんはちびっ子を軽く睨み、助けを求めるようにゴードンさんの方を見ます。

「とりあえず、もう少し進んでみましょうか」

ゴードンさんの出した答えに、巨乳ちゃんは不満顔です。でも仕方ないですよ。こ

のままここにおいても、残像が動き出さない事には始まらないでしょうから。私達は揃ってマークスの後ろから右脇へと移動しました。真後ろには例の残像群がいますが構いません。どうせ彼らには私達の姿は見えませんが……私の方は慣れたみたいですよ。

改めてマークスの方を見ると、廊下ではぶれた姿だったのに、今は周囲の残像同様はつきりと見えます。その腕の中には……きれいなままのジューンがいました。

彼女の遺体は、どうやらマークスのマントか何かにくるまれているみたいですが、その顔には傷一つありません。ちよつとほっとしました。

おそらくは神聖術か、勇者の使う術で元に戻したのでしょうか。聖地で見たアンジェリアやソフィーと同じく、まるで眠っているような姿です。

彼女の顔を確認して、私はこれまで何度も見た夢を思い出しました。祭壇の奥から私に語りかけてきた、見知らぬ少女。あれは、やはりジューンでした。

私達がマークスのすぐ隣に移動して間もなく、残像達が動き始めました。途端に周囲がざわつきます。ここが、魔王の指定した位置のようです。

大広間の中には罵声ののしりが飛び交っていますが、マークスは聞いているのかいないのか、

微動だにしません。彼の視線は玉座の王に向いていました。

『なんだ、その姿は！』

『王の御前に死体などと、不吉な！』

『跪ひざまずかぬか！ 一介の騎士風情ふうせいが凶々しい』

などと言いつつも誰も実力行使に出ないのは、彼の「力」を理解しているからなのか、それとも別の理由からなのか。

それにしても、「一介の騎士風情」だなんて。確かにマークスの家は男爵より下の下級貴族でしたけど、彼は魔王を倒した「勇者」なのに。

『どういう事ですか？ 彼は魔王を倒した英雄でしょう？』

巨乳ちゃんがそう思うのも、無理はありません。私達の間では、勇者は世界を救う英雄です。それをこんな風に扱うなんて、信じられない思いです。

「権力者なんてこんなもんでしょ。自分達は安全な場所において、危険な場所にはいつでも下の連中に行かせるのよ。そのくせ、下の連中の功績は自分達のものと思うんだわ」

ちびっ子が吐き捨てるように言いました。何か権力者に対して嫌な思い出でもあるのかしら。

神殿において、しかも高位の神官になると、常にそうした権力者達と渡り合う事を要求

されるのでしょうか。

「私自身、何度か身分が高い人達と接する機会を得ました。だから、悪い人達ばかりじゃないのを知っています。王女殿下や国王陛下、公爵閣下。広い意味では巨乳ちゃんもそうですね。」

でもそれと同じだけ、この広間で罵声を飛ばしている残像達のような人もいる事を知りました。その代表が元シーモア侯爵です。

「おそらくは自分達が何をしたか、理解はしているんでしょう。その後ろ暗さを払拭する為に、わざと高圧的に言っている可能性がりますよ」

私達より半歩前に出ているゴードンさんが口を開きました。

「そんなもんなんでしょうか。それにしても他に聞いている人はいないはずなのに、三人とも声を潜めているのは何故でしょうね？」

あ、周囲の声聞き取れなくなるからですか。

大声でわめいてる人もいますが、ほとんどがひそひそ話をしているので、それを聞くと思うとこちらの声を抑える必要があるようです。

確かに耳を澄ませば色々聞こえてきますよ。「あの程度の事で」とか「思い上がっている」とか「わきまえていない」とか。随分と勝手な言い草ですね。

ジューンとしてこの城にいた頃、国王からは散々あれこれ言われましたが、周囲の貴族連中も陰で言いたい放題だったんでしょうね。多分アンジュリアとソフィーがジューンの耳に入らないよう、取りはからってくれていたんでしょう。あの二人の事を思うと胸が痛みます。

玉座を睨みつけていたマークスは罵声を浴び続けていましたが、やがて俯き、それから今度は周囲を一睨みしました。大広間は一瞬で静まり返ります。

周囲の人々の顔に恐怖がべったりと張り付いているところを見ると、ゴードンさんの予想は正しかったみたいです。

『何故、彼女を殺した』

しんとした大広間に、マークスの押し殺した声が響きます。彼の目は、玉座の王を見据えています。鋭く突き刺さるような視線が怖いのです。

彼のその姿からは、限界まで抑え込んだ怒りと憎しみが透けて見えるようでした。その声を契機に、周囲の残像達が再びざわめき始めます。

これは私の知らない、あの夜の出来事なのでしょう。マークスはこれを私達に見せる為に、ここまで誘導したという事ですよ。でもどうして？

この後の事は既に知っています。王国の都がどうなったかも、魔王と勇者の連鎖がどう続いているかも。私がそれに、どう関わっていたのかも。

聖地に私達がいいた事を、マーカスは察知していたのでしょうか。勇者同士の共鳴する力を利用すれば、グレアムがどこにいたかも、その傍に私がいた事もわかつたはずです。

そして、聖地で私達が何を知ったのか。それも共鳴の仕組みを使って把握できていたと思います。なのに何故、マーカスはわざわざこれを見せようと思ったのか。それがわからないんです。マーカスと王達のやり取りの中に、何か重要な情報があったりするのでしょうか。

尋常でない様子のマーカスを前にして、玉座の王もたじろいでいます。無理もないでしょう。こうならないようにと策を練ったはずが、あっさりバレて追及されている訳ですから。

それに、直接ではなくとも自分が死なせたジューンの亡骸を前にして、持ち前の小さな部分が出たんだと思います。そのくせ変なところで欲が深いから、他にも似たような事をよくやらかしていましたよ。びびるくらいなら最初からするな、と何度思った事か。王はそんな醜態を晒しながらも、彼をなだめようと声を出しました。

『ま、待て、マーカス。我々は悪くない。目を離れた隙に、その娘が勝手に城の外に出

たのだ。それを民衆が見つけて——』

『嘘をつくな!』

マーカスの恫喝に、周囲の残像達は怯えた表情をしています。

「随分と陳腐な言い訳ですわね。あれが通ると本気で思ってるのかしら」

「さあ? とりあえず言っておけ、くらいの気持ちなんじゃない? 最後は権力で押し切るつもりだったんでしょ。ああいう手合いが考えそうな事よね」

巨乳ちゃんはまだしも、ちびっ子は相変わらず辛辣ですね。でも当たっているから何とも言えません。本当、とりあえず言っておくというのが多いおっさんでしたよ。深く考えない性格だったんでしょね。

周囲は王とマーカスを交互に見ていますが、誰も何も言いません。その中で気丈にもマーカスの前に出た人がいました。騎士団長です。マーカスは騎士団に入っていたので、彼にとっては直属の上官に当たります。

「あれは誰だかわかりますか?」

ゴードンさんに小声で聞かれて、頷きながら答えました。

「騎士団長です。マーカスの上官に当たります」

「なるほど」

そんなやりとりをしている私達の前で、騎士団長は国王とマーカスの間に立ちほだかっています。大柄な彼の前では、長身でも細身のマーカスは小柄に見えました。

『控えよマーカス！ 主君の御前であるぞ!! 貴様が戻ったと聞いて、この遅い時間に皆様方が集ってくださったというのに。もう少し殊勝な態度を見せたらどうだ』

騎士団長は、胸を張るようにしてマーカスに命令しました。自分の優位を信じて疑わない態度です。それが表情にも表れていました。

彼は横柄おうびな人物という印象はありませんでしたが、だからといって接しやすい人物という印象もありません。どちらかと言えば、遠巻きにしていた相手だったと記憶しています。

ただ、王とそれ以外の勢力が対立した時は、間違ひなく王の側がわにつく人間だと言われていました。それを私に教えてくれたのはアンジェリアです。

マーカスは彼を一瞥いちべつし、鼻で笑ってから、バカにしたような口調で言いました。

『ふざけるな。主君？ こんな下衆げすのどこが主君だというのか。殊勝な態度を見せろ？ その必要がどこにある』

『貴様!! 口が過ぎるぞ! 何様のつもりだ!!』

『貴様らこそ何様のつもりだ! 自分達が何をやったのかわかっているのか? 恥知ら

ず共め。貴様らなど、忠誠を誓うに値あたしない!』

マーカスはそう言いながら、騎士団長を通り越して玉座の王に鋭い視線を向けました。彼の言葉は憎悪に満ちていて、聞いているこちらが息苦しくなる程です。言葉にこれ程の力があるなんて、知りませんでした。

「確かに」

「私は彼の発言を支持しますわ」

「私もあの国王に忠誠を誓う価値はないと思いますね」

ちびっ子、巨乳ちゃん、ゴードンさんは、共通してマーカス支持のようですね。当然私もです。この後の事を考えると、ちよつと迷いますけど。

他の前世の記憶と同様に、ジューンの記憶もあまり自分の経験としては感じられませんが、それでも彼女が受けた苦しみを思えば、この愚かな王には怒りしか覚えません。

それと同時に、少し怖くもあります。これを見終わった時、私の中にどんな感情が生まれるのか。私も魔王と同じく人を憎み、その死を願うようになってしまったら。そう思うと、胸の鼓動が早くなります。

マーカスの言葉にひるんだ騎士団長ですが、恐怖を怒りに変えた様子で腰の剣に手をかけました。